

都難言協会報

東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会

「ことばときこえの教室における言語発達の指導で大切なこと」

東京学芸大学 名誉教授 大伴 潔



「ことばの遅れ」と一口に言っても、その状態には大きな個人差があります。私が行った調査では、「話すときには、短い文で、内容の乏しい発話になる」といった文表現の困難という実態を探っていくと、語彙が少なかつたり、整った文を構成することが苦手であつたりすることに加え、文章の理解にも難しさがある傾向も示されました。また、語彙の乏しさは、音韻意識の弱さや、柔軟な発想の困難とも関連するようです。したがって、「ことばの遅れ」という印象はどこから来るのか、また、指導では、語彙、文、文章のどこに焦点を当てたらよいかを、アセスメントを通して検討することが、指導の出発点となります。

指導内容の検討になり、子供のニーズに合致し、意欲をもって取り組める教材の選定・作成になりますが、ここでは子供とのかかわり方や心構えについて三点述べることになります。

第一に、表現する機会を最大限に与えましょう。子供がうまく表現できないと、沈黙の時間を埋めるために、大人は自分が話し始めてしまいがちです。しかし、子供にとつては教師の説明を聞くよりも、子供自身が自分のことばで表現しようとする試行錯誤のプロセスの方が重要です。傾聴の態度で子供に向き合い、発話の機会を十分に与えているかを振り返ってみましょう。

第二に、表現に対して適切なフィードバックを与えましょう。子供の発言を尊重し、否定しないという前

提で共感的に応答します。しかし、これは子供の意見に何でも賛成するという意味ではありません。異なる観点の提示もフィードバックの仕方のひとつです。子供の発想を受け入れつつ、「先生はこう思ったよ。」と応じることで、子供の観点を広げます。子供の不十分な表現や文法的な誤りに対しては、肯定的に受け止めたうえで、さりげなく言い直しをして聞かせます。これをリキャストと呼びます。

第三に、分かったことについての達成感を共有しましょう。子供は、教科書などで読む文章の内容を十分に理解していないことがあります。まずは、文章の中から理解が十分でないと思われる語を拾い出します。教師は即座に語の意味を教えがちですが、「どういう意味かな。」と教師自身が自問自答しているようにつぶやき、子供に考えることを促しましょう。

文章全体の内容については、大事な語句を拾い出し、つなげて大意を

汲み取ります。そして、子供の「そうだったのか」「分かった」という納得の喜びを共有しましょう。読むことが苦手な子供には、同じ文章を耳から聞いてもらって理解する、反対に、聞いて理解することが困難な子供には、目で文章を読んで理解するといった、「読んで理解」と「聞いて理解」を組み合わせると良いでしょう。

大人の役割は、子供に考える機会を与える「誘導」、子供からさまざまな表現や意見を引き出したうえでまとめる「整理」、子供から挙がらなかった観点を表現についての「例示」、達成感を得られるような子供の見解の「承認」です。大人は子供と「一緒に考えるパートナー」であることを保護者にも理解していただきます。家庭では「できたかどうか」ではなく、「考えようとする姿勢」に対して褒めてフィードバックすることを実践してもらえると、子供も家庭での学習に意欲をもてるのではないのでしょうか。

◆主な内容◆

- 一面 ことばときこえの教室における言語発達の指導で大切なこと
- 二面 第九回専門研究会／きこえとことばの教室
- 三面 学級紹介／発音の練習をがんばっています！
- 四面 全難言協全国大会東京大会に向けて／ブック研究発表会について 他

都難言協
ホームページは
こちらから

https://www.tonangen.com/

第9回
専門研究会

吃音のある児童の理解と支援
〜吃音で悩んだ経験から伝えたいこと
本当に必要な支援とは〜

長野県小諸養護学校 高山 祐二郎 先生



吃音の進展

連発（「おおはよう」のように、語頭の音を繰り返して発音する）を伴った話し方が吃音のある人にとっては自然な話し方である。しかし、言い換えや間を空けるなど、連発を出すまいとする工夫を続けていくと、「吃音の進展」が起こり、吃音が悪化してしまう。吃音の進展は以下のように進んでいく。

- ・連発
- ・伸発（おーはよう）のように、言葉を引き伸ばして発音する）
- ・難発（「……っおはよう」のように、言葉が出にくくなること）

外から見える吃音症状が見えなくなるにつれて、言葉を出しづらくなるため、心身共に本人の負担が重くなってしまう。この状態を「吃音の複雑化、吃音の二次障害」と呼ぶ。これにより、話すことの回避や、随伴反応、自尊心の低下、自己実現の疎外につながってしまう。

これを防ぐために、まずは、吃音のある本人が、「連発が起こることが、自分にとって自然で楽な話し方である」と認識することが必要である。

連発を伴った話し方のまま学校生活を送るためには周囲の理解が不可欠であり、「どもってもよい」と伝えられ

るようにするために、ことばの教員として、在籍学級での理解や教職員全体での情報共有に力を尽くしていかねばならない。

吃音の理解授業

吃音支援の柱は「悪化の予防と緩和」である。「悪化」とは、自然に出る連発を出さないようにして苦しむること、「緩和」とは、楽な話し方に引き戻すことを指す。

実際の授業の中では、自己紹介をして気付きを引き出すとよい。同じ言葉を繰り返したり、のびたりすること、吃音であることに気付かせる。そして、このような話し方をする人は周りにいるか、また、なぜそのような話し方になるのかを考えさせる。それが自然な話し方であることを伝えた後に、「ならないように気を付けて話したらどうなるか？」と問いながら、進展の仕組みを理解する。

理解させたら、「なぜ笑ってはいけないのか」を考えさせる。吃音であることを、みんなが受け止めてくれている状況を作ることが大切である。また、掲示物を使って説明することも効果的である。

- ① 吃音を伴った話し方を知る
- ② 吃音が進展・悪化する仕組み

③ 周りの対応や関わりについてを伝える。

研修を通して伝えたいこと

・幼児期や学齢期をどのように過ごすかが非常に重要である。私自身は吃音の進展を知らず、連発を出さない方がよいと思っただけで、流暢に話すための努力をしてきた。その結果話にくさが増していった。早い段階で支援を受けたり、自己理解を進めたりすることで、吃音と向き合い、楽に言葉を話すことにつながる。連発のまま話すことが楽である、という認識を自分でもち、周りの人に知ってもらふことの重要性を理解することが求められる。

・吃音であることで苦労がなくなることはないが、ストレスを軽減することはできる。自然に出てくる連発をそのまま話すことを尊重する。「吃音を抱えたままどう生きていくのか？」決めるのは本人だが、私は吃音を隠した時期や悩んだ経験があるからこそ、通級の時間を通じて吃音のある子供自身が自己理解を深めていってほしい。

・小さな妥協を積み重ねながら大人になるからこそ、「大丈夫」という言葉をどのように捉えるか考えなければならぬ。自分と同じ経験をしてほしくないし、させてはならないと強く思う。吃音のマイナスイメージを捉え直し、自己理解が深まったとき、本当の意味での「大丈夫」になる。

文責 塚田彩音

きこえとことばの教室 あの頃、そして今

北区立赤羽小学校 伊澤 浩仁

教師になって、今年で40年です。私は、初任ですぐにきこえとことばの教室の担当となりました。

その頃、私の吃音指導は、U仮説(内須川式臨床診断仮説)を基本にして行っていました。吃音のある子たちが無意識のうちに抑えている感情を表出させると共に、人間関係における過敏性の「過」を取り除いていく指導を中心に行いました。感情の表出は、まずは行動面で行うということで、プレイルームで、よく戦いごっこをしました。

お互いに砦を作り、汗びっしょりになりながら、ボールのぶつけ合いをしていました。また、リヤカーに乗って、地域巡りをしたいという要望に応え、吃音のある子をリヤカーに乗せ、学校の外に飛び出して行ったこともありました。

今、吃音指導については、様々な取り組みが行われています。流暢性形成法や吃音緩和法など、話しことばへの働きかけ、自己の吃音の理解、吃音のある自分の理解、環境調整など。

指導法が変わっても、子供たち一人一人の自己肯定感を高めていくきこえとことばの教室のあり方は変わりません。

◇ 学級紹介 ◇

葛飾区立青戸中学校 難聴通級指導学級

本学級は昭和43年に開設され、今年度は校内外から4名の生徒が通級しています。

校内通級生徒は、個別や少人数で、静かな環境で視覚教材や補聴援助スピーカーを使用した授業を受けることで、分かる楽しさを実感し、意欲的に授業に取り組むようになります。放課後に行う自立活動は集団で楽しく過ごし、一日の振り返りや行事の詳細、校内放送の内容確認など、様々な情報が抜け落ちないように補い、安心して学校生活を送ることができるようにしています。

本校の校外通級生徒は、放課後に通級し、きこえについての困りごとや勉強の相談などをします。聞こえにくいことを気にせず会話できる仲間や通級担任と安心して過ごせる場で、いろいろ会話を楽しむことで日頃の緊張した気持ちを和らげ、心の安定を図っています。

難聴学級は中学校までしかないので、3年間の生活の中で、揺れ動く心に寄り添いつつ、自分で頑張ってみようとする勇気を後押しし経験を積ませます。頑張った自分に自信をもってたくましく人生を歩んでいけるよう、日々励ましながら支援する「楽しく元気が出る学級」でありたいと思います。

文責 伊藤結花里



発音の練習をがんばっています！

Q1. 発音の練習では、どんなことをしていますか？

- ・ベロを上にあげる練習
- ・ベロを思い切り下に出したり、左や右に動かしたりする練習
- ・空気がもれないように真ん中から出すようにする練習
- ・口を開けたまま、「んー」という練習
- ・「イ」がつくことばの練習

Q2. 発音がよくなったら、何か挑戦してみたり、楽しんだりしてみたいことはありますか？

- ・将来の夢は、ユーチューバーか、サッカー選手だから、発音がよくなるといいな。
 - ・電車のことをお話したい。
 - ・いろんなことをしゃべれるようになりたい。
 - ・友達や家族にいっぱい頑張ったことを話す。
 - ・できなかった発音を友達に言えるようにしたい。
- ※他にも、「普通に話す時に不便だからよくなるといいな、と思っている」「友達と自由に会話したい。聞き返されてないから、伝わっているんだろ

ある小学校のことばときこえの教室で、発音の練習をしている子供たちにアンケートをとりました。一部をご紹介します。

うな、と思うけれど、聞き取りづらいかな、とは思うから」などの意見がありました。

Q3. 発音がよくなったら、だれに発音を聞いてもらいたいですか？

- ・みんな！
- ・担任の先生とことばの先生と習い事の先生
- ・お母さん、お父さん、先生、友達

「発音の誤り」ってどんなこと？

発音の誤りは、音の置き換わり（例：「カ」→「タ」）、歪み（例：「キ」→「チ」に近い音）などがあります。発音の誤り方によっては、自然に改善しにくく、また、改善に時間がかかるものもあります。そのような発音の子供たちは、コツコツと一生懸命、練習に取り組んでいます。なかなか周囲が気付きにくい発音の誤りの種類がありますので、各区市にあることばの教室にお問い合わせせくだされば、対応させていただきます。

文責 鈴木リエ子

全難言協全国大会東京大会に向けて

令和七年度に、全難言協全国大会東京大会が開かれます。

現在、河野芳浩実行委員長(世田谷区立烏山北小学校長)を中心に、各ブロックから選ばれた実行委員が、「新しい時代に向かう都難言協が作る大会」を目指し、協力して準備を行っています。

○大会テーマ

『新しい時代へ』
『つながり、結び付ける』



大会シンボルマークのヒマワリには、前回大会のつながりの花から成長し、大輪の花になるようにとの願いが込められています。

「輪」は、常に回り続け、変わり続ける強さを、二色で交互に編み込まれた花びらは、教員同士のつながりや各教育機関との連携を表しています。

○日時・会場

令和七年七月二十八日(月)～

三十日(水)

国立オリンピック記念青少年総合センター

○主な内容

〈一日目〉

・基礎講座(構音・吃音)

基礎研究会と連携し、全国の三年目の先生方を対象に行います。

〈二日目〉

・記念講演 大西孝志先生(東北福祉大学)

「すべての子供たちの学びの充実に向けて」適切な指導と必要な支援へ

・パネルディスカッション

「吃音」「難聴」について、様々な立場のパネリストが議論を行います。

〈三日目〉

・分科会

七つの分科会を設定し、テーマに沿った話し合いを行います。実行委員研究会は、大会が円滑に運営できるように、さらに綿密に計画していきます。今後は、都難言協の総力を上げて準備にあたることとなります。「輪」のテーマの下、全国の方に参加していただき、実り多い研究会になるよう、一層のご協力をお願いいたします。

詳細は、都難言協ホームページをご覧ください。

東京大会実行委員研究会より



◆ブロック研究発表会について◆

多摩南ブロック

・テーマ

「一人一人に応じた指導の工夫」多面的な観点からの見立てを通して」

・講師 早稲田大学教職大学院 非常勤講師他 長岡 恵理 先生

・日時 令和七年一月二十一日(火) 午後二時から四時半まで

・実施方法 Zoomによるオンライン開催

城西ブロック

・テーマ

「聞くことや話すことに課題のある児童の理解と指導・支援」伝えたい思い・伝える力を高めるために」

・講師 中央大学大学院 文学研究科 教授 松井 智子 先生

・日時 令和七年一月二十八日(火) 午後二時から四時半まで

・実施方法 Zoomによるオンライン開催

城東ブロック

・テーマ

「自分を知り発信できる力を育てるために」吃音や難聴のある児童への指導・支援を通して」

・講師 元きこえとことばの教室 教員 池田 幸男先生

・日時 令和七年二月二十五日(火) 午後二時から四時半まで

・会場 足立区立千寿本町小学校体育館



事務局より

事務局では、他団体との連携を推進するとともに、常任幹事会や役員研究会を通して、都難言協の活動が充実するよう活動しています。

都難言協は、各区市の分担金や東京都教職員研修センターの研究奨励費、会員の方々等の協力によって支えられています。研究において専門性を高めることにより、「通級指導学級」制度の維持・発展を目指しております。来年度も御協力をよろしくお願いいたします。

―編集後記―

御多忙の中、本会報作成にご協力いただきました皆様にご感謝申し上げます。

本会報を通し、難言教育に関わる皆様との情報共有と、日々の通級指導の充実にお役立てて頂けましたら幸いです。

都難言協会報

代表者 (会) 長 吉村 浩
責任者 (広報委員長) 佐久間 貴広
発行日 令和七年二月六日
発行数 六一五〇部
印刷 有限会社 正陽印刷